

平成 29 年度 女性と市長との懇談会（1 回目）

懇談テーマ：①若者の地元定着について ②防災対策について

平成 29 年 10 月 31 日(火)13:30～15:30

中津川文化会館多目的研修室

出席者 女性 14 人 11 地区

市長・政策推進部長・定住推進部長・女性活躍推進対策官

生活環境部長・防災安全課長・定住推進課長

●市長挨拶

本日は、女性懇談会に大変お忙しい中、大勢のみなさまに出席いただき本当にありがとうございます。また、日頃より中津川市政につきまして、みなさまにご理解、ご協力を賜っておりますことをこの場を借りまして厚く御礼申し上げます。

いま、中津川市は、合併をして 13 年目を迎えております。平成の大合併で、全国で 427 の多くの市が合併しました。この合併の背景は、従来の 3,000 近い地方自治体に対して、国が従来どおり支援していくことが難しいという国の財政苦でした。合わせて、地方自治体も疲弊しておりました。そのような背景から、10 年間の期間で市には特典を与えて合併を進めてきた経緯があります。

合併から 13 年経ったわけですが、中津川市もそれぞれの旧自治体の歴史、伝統、文化、地域の暮らしは、近いところでも異なる部分も多くあったわけです。机上で合併したらこういうまちにしようという当時の計画は、実際合併をしたら、なかなか計画通りには進んでいかなかったのが現状です。したがって、本来なら新しいまちとしてすべてが当初の計画どおりに進んでいるというのが 13 年目を迎えた現在になるわけですが、なかなかまだまだそこまでたどり着けていないのが現状です。

人口減少という課題が大きいのしかかってきています。人口減少に対しては、当初静かなる危機といわれ、1.2 億人以上の人口が日本にいなくてもいいのではないかと、8,000 万人でもいいのではないかと、ヨーロッパの歴史のある国々が 6,000 万人、7,000 万人の人口でしっかり存在感ある国を作っている。したがって人口が減ることは、そんなに心配したことではないという意見も多くありました。しかし、実際には、戦後間も

ないころには6,000万ちょっとという人口が、僅かな期間で倍増して、そのなかに、さまざまな社会のしくみが作られました。合わせて、世界に誇る東京という大きな街も出来上がったわけです。こうしたことが、一極集中によりますます地方の人口減少に拍車がかかっているのが現在の状況です。

そうした状況から、それぞれの地域がんばれというかたちで現在、地方創生等さまざまな施策が打ち出されているわけですが、とりわけ、今日のテーマでもある若い方の地元定着です。地元を離れる傾向がますます強くなっていることが、中山間地の中小都市にとってはたいへん大きな課題となっております。

なにが課題かという、まず消費量が極端に落ちて、みなさんの地域で昔あったお店や飲食店が無くなっていく。そうしたことが頻繁に起こるようになってきます。そして、就業人口が減るということは中津川市で企業が仕事をしたいが集まらないから中津川への進出はやめてしまうということです。現在、中津川市でがんばっていただいている企業が工場を拡張したい、従業員を募集して充実したなかで事業展開をしたくても従業員が集まらない。だったら新しい部門は他の地域でやろう。こうした動きがそれぞれの地域で起きています。

中津川市は合併以来、県下の有効求人倍率が1～3位と高いところで推移しています。過去には高い有効求人倍率を誇った時代もありましたが、慢性的に人が集まっていない、働く人が不足することが大きな課題になってきます。さらに、こうしたことが人口減少に拍車をかけて、身近な医療や、教育などの生活環境にも影響が出てしまうことが大きな地域の課題となっております。

6年前に中津川市には、リニアの岐阜県駅設置が決定しました。いま中津川市はリニアを活かす取り組みを進めています。リニアが来るだけでまちづくりができるとは考えていません。与えられたアドバンテージです。坂本地区のみなさんはリニア施設が来ることによって、周囲の環境や従来の生活環境が変わってしまうのではという心配もあります。そうしたことに丁寧に対応しながら、リニアを活かしたなかで中津川に活力を、多くの雇用の場、そして教育、医療の発展的な継続を目指そうとしています。

本日は、「若者の地元定着」と、本年は台風の接近による避難勧告等も4回ほど発令させていただきましたが、中津川市の「防災対策」についてのご意見や現在の取り組みの説明をさせていただきますのでよろしくおねがいします。

市政懇談会を各地域15の場所で開催していますが、さまざまな意見が出ますので、ぜ

ひ市政懇談会に出席していただければと思うのですが、女性の参加者が非常に少なく、時間の制約上思ったことがなかなかいえない雰囲気もあるようなので、市政懇談会の他に、女性のみなさんとの懇談会、そして20歳を過ぎた若者懇談会を開催させていただいています。

本日は忌憚のないご意見をいただきまして、そして、女性懇談会のなかですぐに改善させていただいた案件もありますので、それを踏まえた意見交換とさせていただきたいと思っておりますのでよろしくお願いいたします。

懇談①若者の地元定着について

●〇〇さん

UIターン者用住宅に5年住んでいます。神坂にもともと家がある人が3世帯、その他の地区からの方もいますが、定着したのは神坂に家がある人が多くて、他の地区の方も住むつもりはあったのですが、土地が見つけれなかったのが、結局、中津に家を建てました。いい土地があっても地代が高かったり、譲ってくれる土地は山の中にあって不便だったりということがあって神坂に定住してもらえなかった。それから、家を建てたくても土地に担保として価値がなく銀行から借入れができなかったという事例も聞いています。住む土地がなくて住めないというのが今の現状だと感じています。

幼稚園が公立しかなくて、働く世代のお母さんが仕事を持ちづらい状況にあります。学校が終わってから子供を預けるところもなく、若者の間でどうにかできないか話しているところです。そうしたところがあれば、子育て世代も定住が進むと思います。

●〇〇さん

女性は福岡から男性は駒場から最近引っ越してきた同じ班のご夫婦の方から聞いたことですが、蛭川は人がいいということと、自然がある、近所づきあいができるからいいと言っていました。駒場は蛭川より街なので夜になると街灯が無くて真っ暗で寂しい、夜、犬の散歩するにも暗すぎて怖いので、少し街灯があればいいな、と聞いています。

41歳の独身で横浜からみえた方もいますが、40代なので中津川に住もう！の市の補助制度の対象外になってしまう方がみえます。その点がもう少し緩和できればと思います。

いま、住んでみえる人が恵那の定住促進で、中野方だったかのパンフレットを見て蛭川よりそこへ行きたいな、と思ったそうです。補助金の額もいいとか、写真を見て、隣なので比べてしまって、いま迷っているという話をしていました。蛭川のいいところは人がいい、周りの人がよく声をかけてくださるし、地元で安全な野菜を栽培している人や、竹細

工などの職人がみえたり、そうした人を伝って移住してくる方もみえる。蛭川はお祭りもあるし、歌舞伎もやってる。おかあさんたちが「ママさん朝市」を元気にやってくださって振興会も応援しているが、規制がもう少し緩くなるといいと思う。

●〇〇さん

もともと川上で生まれて育って、一度東京で就職して3年くらい出ていて、父親に帰ってこいと言われて帰ってきました。地元で育ったからこそ帰ってきたいと思って帰ってきて、川上の人と結婚してずっといる状態です。

私の世代や私の下の世代はどんどん外へ出て行ってしまって、結婚しても地元に住まない。結婚してなくても、中津川市街やもう少し大きい都市に行ってしまう。結局、仕事がなかったり、住む場所がなかったり、若い人は一人暮らしがしたいという理由もあるので、それも考えるとどうしても地元には住みにくい。

外から入って来る人も大事ですが、まず地元に残る人間を残していきたいということも大事なことだと思います。地元の行事に参加して動いてくれる若者もいるが、結婚して外へ出ていったり、子育てがしづらいから外に出て行く面も多いので、その対策を考えていけるといいと思います。

現在、ヤクルト販売の仕事をしてしていますが、独居の家が多いです。ということは、もっと昔から川上から外へ出て行く人が多かったのが今の状態になってしまっているということなので、外から呼ぶよりここにとどまる人間を増やすべきかなと思います。

合併して保育園や学校が削られるかもしれないという思いがありながら子育てしているよりも、だったら最初から大きいところへ移動してしまおう、という気持ちになってしまおう。幼少期のころから地元に残ってくれるような子育てをしていかないと、どんどん過疎化が進んでしまう。

私たちが仕事をしなければ子育てができないが、学童に預けても人数が少なすぎて2、3年後には閉鎖してしまうかもしれない。市の補助も、人数が20人以上、稼働日数が250日以上という数字をクリアしないと補助金がもらえないが、台風などの警報が増えて閉鎖する日数が多かったり、夏休みも先生の数が少ないので、補助の先生が少なくてメインの先生が苦勞してやっていて、その先生がもし病気になったら閉鎖するしかない、という悪循環なことになっています。

地元就職はしていても結婚していない男性が多いということは、やはり地元に残る人

が少ないことにつながるので、その点も大事。田舎の独身男性は、はずかしいとかで、市がやっているお見合いイベントなどになかなか参加していないので、(それに対する対策も)若い人を呼べるきっかけになるんじゃないかと感じています。

●市長

やはり若者の地元定着の課題はたくさんありますね。まさに原因が一つではなくて、さまざまな生活環境が整うなかで、地域の魅力が出るということです。〇〇さんがおっしゃった恵那のPR誌がいかたちでできているというのは、補助金の面だけ見ればそういう部分もあるかもしれないが、中津川市はトータル的な子育ての援助を充実させている自負があります。新しく転入したときだけの補助だけではない。私の知り合いが子育ての最中に恵那に行きましたが、2年で帰ってきました。やはり中津川市の方がトータル的に優れていると言ってくれました。今いただいたご意見はそれぞれすべて大きな課題として取り組んでいます。

〇〇さんがおっしゃった土地の取得は、市政懇談会のときもUIターン住宅の居住年数を延ばしてほしい、地元で希望する土地が見つからない、農地法など、いろいろな課題をいただきました。UIターン住宅の制度を取り入れたのはそもそもここに入っていく方とのコミュニケーションからスタートして、住宅に住んでみえる方たちが、ここに生活したいと言われた方に売買を伴う土地の提供を協力していただきたいという中で、地域の合意がとれたところから順番に建築していった経緯があります。しかしここ3年UIターン住宅の建設をストップしました。それは、たとえば神坂に住んで中津川で仕事をしている。子育ても済んだ、5年経った、ここを出ないといけない、どうせ出るなら、中津川か坂本に家を作ろう、アパートに入ろう、そういう方が多くなってしまったからです。しかし、現在も130名ほどの方はUI住宅に入っているため、土地の取得、用地の確保含めて、行政だけで土地を見つけて提供するというのは難しいので、都度、地元で協力をお願いしています。

公立保育園しかないことについては、恵那市でも大半が指定管理として民間がやっているが、実は旧郡部ではほとんど公立しかない。民間保育園は経営ありきです。選択肢を広げるためにわたしたちも民間に期待していますが、どこどこで保育園・幼稚園を作っただけなのか、という話をするが、ほとんど乗っただけなのが現状です。そういったそろばんの合わないところに公立の幼稚園・保育園を作っていきましょうというのが地域の实情です。この件については申し訳ない。

もし、私立の保育園・幼稚園がやれることが、公立でもどこかでできるならと思うわけですが、その場合に保育士さんの就労状態がどこまで整備できるか。さまざまな事情のな

かで、果たしてそこで働いている人たちの労働環境まで手が回るかという大きな課題があります。中津川市も保育士を目指される方に、修学資金を貸し付けて、卒業して中津川で5年以上働いてもらえば返還していただくなくても結構ですという、県内市町村初の制度をつくって保育園の先生も獲得していこうという方向を出しています。少し時間がかかるかもしれませんが取り組みをさせていただいています。

蛭川の人が良い、環境がいいという話ですが、不動産屋さんと最近話をしましたが、今中津川の企業で働く若い人たちが、工業団地がある坂本周辺で家を新しく作りたい、という話のときに、最近若者が選ぶ条件の中に、土地がいくらかだけではなくて、この地域の近所づきあいはどうですか？どんな地域ですか？という調査依頼があるそうで、若い人がどんな地域なのかということに興味を持つ時代となりました。地域の会やいろんな組織がありますが、そこに顔をださないといけないことが大変苦痛だったり、地域のきずな、コミュニティが大切ということと、また縛られたくないという若い人の気持ちのギャップがあるのも事実です。地域の付き合いが励みになるから地域へ入りたいという方、それが嫌だから都会へ行くという方、両面の考え方があります。

地元で育った若い方に留まってもらって地元でがんばっていただくという施策を第一にあげています。いったん修学で地域を出ても帰っていただく気持ちを育むにはどういう取り組みをしたらいいか検討しています。先ほど説明したように、転入者はH27よりもH28は改善している。これから続けていくなかでどのように改善が進んでいくかを、外部評価委員で事業の実績を定期的に評価していただいて、進捗も管理してもらっています。

高齢者の独居については、都会でも誰にも看取られず一人で亡くなっている。そんなに疎遠なのか、という思いもあります。私は同居手当を企業に出してもらえないか、と思っています。住宅手当ではなく同居手当を出していただいて、そうすれば高齢者と一緒に住んでもらえるし、子育ての助けにもなる。それが嫌だという方もいますので一概にそうは言えませんが、1つのなんらかの解決策に向かうことができるのではないかと思います。

婚活については、男性だけでなく女性の独身の方にも出会いの場を広く提供することが大事だと思っています。そうした場があっても本人の気がないとうまくいかないのが、生活の中の刺激を与える環境をつくって、いろんな出会いの場にも引っ張り出してあげることにみなさんも協力してもらいたい。

●○○さん

実家は南木曾の田立です。結婚して長野県の諏訪地域へ行きました。広くて自然も豊か

でいいところだったのですが、子育てについてはすごく不便でした。一回医療費を払ってから2ヵ月後くらいに口座に振り込まれるので、お金がないと具合が悪くても診てもらえないということでした。いいところは、病児保育が充実していて、保育士と看護師がいて、茅野市であればゼロ円で、隣の諏訪市でも1、300円で見てもらえるということですので助かりました。働いていて、保育園からちょっとした熱やケガで呼ばれるとシフト制のところは本当に困るので、本当に助かった。岐阜県に引っ越してきて医療費は無料ですし、妊娠中も長野県は3、4回しか助成がなかったが岐阜県ではチケットがあまったくらいでありがたかったです。

田舎で育ったので、隣の人に醤油を貸してもらおうような生活をしていたのですが、中津に引っ越してきてからアパートにずっと住んでいても、隣にどんな人が住んでいるか、女性か男性かわからないような状態でした。私は子どもがいたのでまだつながりがあったのですが、一人暮らしだったり、ご夫婦だけの方は近所とつながりがないと感じたので、地域のつながりが何かあれば、お年寄りや独居の方とも接点ができるのではないかと思います。

●〇〇さん

学童についてですが、加子母にも学童はあって指導員の先生方も頑張っていると思いますが、加子母のような子どもの少ないところが市の補助金をもらって学童をやろうと思うととても大変なんです。稼働日や人数のような条件を中津川市内と一緒にされると郡部の子どもが少ないところだと学童の経営が成り立たないのが現状です。それと、田舎だからおじいちゃんおばあちゃんにみてもらえる人もいますが、子供を預けられないから仕事に就けない人もたくさんいます。

加子母でもお母さんが働かないとやっていけないのですが、定住について、先日、大正大学の人と話をしたときに、子どもが少ないので子ども同士の遊び場がなかったり、育てるための自然の環境はいいけど社会的な環境が整ってないと、田舎に定住する人は難しいのではという話がありました。定住イコール60歳を超えた退職者が田舎暮らしがいいからといって来られる人もあるのですが、地域の活性化には子育てする人たちが住んでもらえる環境を作ることが大事。そのためには子供を安心して預けられる場所として、学童を充実させて、働くということへの環境を整えていただきたい。

そのことについて、子育て政策室に補助金の対象を考えてもらえないかということをお願いに行こうと思っていました。具体的には、子どもがいて学童がたくさんある中津川や坂本の基準と、川上や加子母の基準と一緒にどうしてもクリアできない。そうすると自分たちでお金を出し合っただけで見えていくとか、学童にあずけられない人も多い。パートで3時

までしか働けない状況になる人たちもたくさんいるので、改善してもらいたい。そちらに
お金をかけてもらったほうが地域の人のためになると思いました。

●〇〇さん

うちも下の小学校1年生の子を学童保育に預けたいとお願いしたときに付知は逆に子どもが多すぎて受け入れられないと、4月の時点では断られてしまった。ありがたいことに、実家が近かったので祖父母に預けて仕事に出たのですが、そんな状況で学童の部屋も満員なんです。

付知は北小学校と南小学校があって、南小学校にしか学童がないのですが、利用者数は北小学校のほうが多いんです。コミュニティバスで送迎してもらっていますが、お母さんたちからは北小にも学童保育があったらいいのという声が聞かれます。それだけ人数はいるんですけど、経営も大変みたいで、アルミ缶を学童保育で収集してそれをおカネに替える運営の仕方も行っている現状です。

上の息子が高校三年生で、中津川市から出て岐阜市の方に通っていて、こっちへ帰ってきたいと職を探したのですが、岐阜市と中津川市を比べたときに雇用条件が違って、結局岐阜市での就職を選んでしまった。いずれは帰ってきたいという気持ちはあるのですが、雇用条件を見たときに都会には劣るところがでてきてしまうのかなと感じました。

●〇〇さん

私の知っている移住してきた方は自治会に入っていない。会費の問題とかありますが、隣の福岡では、どぶさらいに出れなかったら3,000円払わないといけないというルールがある地域があるそうで、蛭川はそういうルールはないのですが、どぶさらいには市から補助金が出ていますか？

●市長

出ていないです。

●〇〇さん

地元の自分たちでやっていることですね。そのおカネで祭りや地域の行事に使ってみなさん納得されているようですが、環境整備のときに、新しい方が来て、出れなかったときに、3,000円とか払わないといけないことになると負担になる方も見えるかな、と思います。

●市長

病児保育については、30年度から市民病院で病児保育ができるよう進めています。遅くなって申し訳ありませんでしたが、県下で一番遅かったです。しかし、病気等については中津川市は県下でも小さい子どもに対する取り組みは進んでいます。

学童保育の条件が厳しいことについては、そのとおりです。今のつくりは文部科学省の流れに乗っています。それと手を切って、どこで中津川独自のものを作るかが分かれ目になってきます。まだまだ学童保育所が足りない状況です。今年、蛭川と苗木で新しく立ち上げて、そちらを優先的にやっている状況です。学童保育所で働いているみなさんとの意見交換が今までなかったので、29年度から定期的に意見交換していただいて、取り入れるところは取り入れ、改善した方がいいところは改善していく取り組みも始めたので報告できるようになると思います。

地域差が出てしまって、同じ旧郡部でも足りないばかりではない、少ないばかりではない地域もあり、逆に旧中津川市内といっても、こちらではあまりという地域も出ています。これからしっかり充実していかなければならないことは間違いないことです。

高校3年生の就職については、(岐阜市で就職されたことは)非常に残念です。実は、市内就職の有効求人倍率は1.75と非常に高い状況でした。これは岐阜、多治見について県下3番目です。若い方とお話しをすると、中津川に働くところがないと言われるが、いっぱいあるんです。昨年から小学生にも中津川にこういった企業がある、こんな労働環境の中で仕事をしている、という現実を見ていただくことを始めました。それに協力いただく企業も増えてきました。わたしたちの年代では製造業というと油、塵という労働環境はよくないイメージを持たれていますが、そうではないということをお父さんお母さんにも参加していただいて、会社の説明もさせていただいています。

10月に大学進学希望の高校生の方を対象に、卒業したら中津川市へ来てくださいと、企業説明会を開きましたが、その結果、出席者ゼロでした。何年か先どうなっているかわからないと思った若い方も多かったと思います。企業を知っていただくには、待遇面はもちろん、どういう環境で仕事ができるかが大切で、労働環境を意外に知らない方が多い。製造業でも、世界のトップメーカーの車、ベンツやオーディオ向けの最先端の技術を中津川で作っています。ものづくりの街中津川を若い方に知ってもらえる機会がないので、これからもPRしていきたい。

私の地域も下刈りが30年前に廃止になりましたが、そのときに、出れないと7,000円だったんです。中学生に3,000円払ってでも出た方が安くなるということで、中学生に出させました。そうしたことで山を覚えてくれました。時代にそぐわないので今は

やっていません。どぶ掃除3、000円は私の地域ではありませんが、地域のあり方、地域の文化という意味では一つの判断材料になっていることは間違いありません。

懇談②防災対策について

●〇〇さん

災害に強いまちづくり計画をつくるときのメンバーに入っていました。5カ年計画だったので見直しになると思うが、その評価や、計画を遂行するにあたっての実施状況が一度も報告されていないと思う。1年に1回は進捗状況の報告があってもいいのでは、と申し上げたこともあった。それについては（回答が）無くて、これから見直されていくのではないかと思うが、その中で、防災士の養成に市が力を入れていることには感謝したい。

災害を防ぐ部分に力を入れていただきたい。事が起こってからの対応も大事だが予防として、災害が起きる前に自分たちが何をすればいいか、中津川市としてはどういうことを市民に求めているかを教えてほしい。

●生活環境部長

検証については、見直しが必要な部分も出てきています。毎年見比べながらやっていますが、昨年度、委員の方に集まってもらって実施状況を報告させていただいた。今年も、状況や改善点、特に集中豪雨の対応など見直しができてきているのでそれも含めて報告させていただきます。

最近よく言われているのが減災対策です。それを市としても取り組まなければいけない。ハード的に何かを作って防ぐのは山が多い地域ですので限度があります。ソフト面で対策を立てることが必要と考えています。防災マップで危険な場所がどこか掴んでもらいたい。減災で大事なのは自分の命を守ることです。防災訓練でも図上訓練等で雨が降ったときにはここは危ないなど訓練していただいています。ソフト面の対策を進めていきたい。命を守るための対策です。

ハード的な部分では、河川では洪水対策を、危険箇所の点検などを行って、できるところから行っています。全部行き渡ることはできないので優先順位をつけて行っています。

●市長

市内では、83年前に四ツ目川災害で死亡者を出した歴史があります。この地域においては民間のみなさんが「災害対策協議会」を立ち上げて、四ツ目川災害のあった8月26日に慰霊祭を伴う研修をやっていきます。川が氾濫したことによって災害が起きたことを忘れないように、そうした行事を今でも続けておられます。そこで、防災講演会を毎年開催

されています。

日にちは違うが四ツ目川の上流に四ツ目川遊砂工があって、そこに保育園児から、小学生、中学生を毎年700人くらい集め、自然災害のメカニズム、山崩れの起き方、水の怖さ、地震の揺れなどの体験的な勉強会が開催されています。こうしたことが減災に結びつくと考えています。できれば、防災訓練だけでなく、みなさんのそれぞれの地域に危険な地域があると思うので、地域で、子どもや独居の高齢者にも、こういうときはどうするか、という勉強会のようなことができればさらに減災が進んでいくと思っています。

●〇〇さん

今日、集まっているのは女性ですが、家庭の主婦が防災の備蓄に関することや、事が起こったときに避難所に行かなくても済むような考え方を持てるように、そのために、何を家の中に準備しておくか、何を子供に伝えておくか、事が起こったらどこに家族が集まるか、安否をどう確認するか、そうしたことをお母さんが中心になって把握しておかないと本当の意味の防災につながっていかないと常々考えています。

今年、役をもらったので、自分の地域で、お母さん方に集まっていただいて、災害が起きたときに何を準備しておいたらいいか話し合いの場を持ちました。それが災害を防ぐことの意識付けの第1歩と思いました。なかなか主婦の方がそうした話を聞くことは難しいです。「災害対策協議会」は上のほうのことですし、そういうことも大事だがもっと底辺のところまで伝えていけるといいと思います。防災士の皆さんが頑張ってみるので、防災士のみなさんが身近で話しをしてもらえる機会がもっとあるといいと思います。

毎年の8月終わりの私の地域の防災訓練は、眠い目を擦って集まって人数数えて終わりなので無駄だと思っています。今年はハイゼックスの袋が配られたので女性が自発的に相談して集まって非常食を作りました。そういうことも言うてくださる人がいないとやれないうですし、ハイゼックスを使ってやることも大事ですが、それは事が起こってからなので、家で、水なり災害時に食べられるものをしまっておけば、そんなことしなくてもいいわけです。そういう考え方をみんなに知らせていくような機会に防災訓練になるといいと思いました。

地震が起きて、避難所が開設されて、安全点検することも大事だけど、本当の意味の防災訓練をみんなで考えるといいと思いましたし、女性目線でいうと、家庭でもう少し考えるような、広報や周知をしてもらえるといい。

●〇〇さん

私は3年前に防災士を取りまして、防災訓練のときに30分くらい時間いただいて、防災芝居や、新聞紙でスリッパや、キッチンペーパーでマスクを作ったりしています。まずは命が助からなければ、いくら備蓄品があってもダメなので、まず自分の命を大切にすることから始まるということです。

男性は消防団で外へ出てしまって家にいないので、家族で話し合いがあまりされていなくて、家に残っているお年寄りや女性や子どもがおいてきぼりにならないように、人を当てるのではなくて女性からも学んで自分たちの命を守るという気持ちを持てるような場が必要と思っています。

防災訓練は女性が少なく、役（職）のある男性ばかりです。車椅子でおじいちゃんを連れていったのですが、そういう方はいません。いざとなったときに、支援が必要な人はどうしているんだろうといつも疑問に思いながらやりました。

去年と今年で変化があったのは子どもたちです。去年は小中学校の子どもたちが何人かいたが、今年は小学生が2人だけだった。学校でも防災教育をやっていると思うが、なぜ地域の防災訓練に来ないのかと思います。そういう場合に個人では声をかけても難しいので、行政や学校で子どもたちが防災訓練に参加するよう呼びかけてほしい。そういう位置づけがあると子どもは大人より興味があるので、たとえばスリッパはなぜ大事かとか、すぐ吸収します。防災訓練で地震が起きたときの行動も、子どもたちの方がずっとやります。子供の教育から大人も変わっていくと思う。

東日本大震災の津波のときでも、子どもが大人に逃げなきゃ、と大人を動かしたということをおっしゃっていました。子どもの感性を、危機感を含めて、教育の現場で、もっとやっていただけると、家庭にそれを持ち込んで、家族会議しようと言ったりします。そういうところを防災訓練を通してやれるといいと思います。高校生の参加はゼロでした。忙しいと思うが年に一回の訓練に参加してもらえるよう、教育の現場では、地域のことを力をいれてもらいたい。

蛭川では暴風雨などで避難所が開設されましたが、夜中の3時半に閉鎖するというメールが来たがなんでその時間に、という声も出てます。避難所開設しても誰も来ないこともあったようで、中津川で何人くらい避難所に来ていたかをお聞きしたい。

●市長

加子母の避難訓練の状況を聞いて愕然としました。市内263箇所で防災訓練を開催していただいている、私や職員も車で分乗して回ります。その中で地域差はあります。一生

懸命なところは、区長さんが他の地域に見学に来てみえます。前と一緒にというやり方が、集まって点呼取って終わりというやり方になってますが、点呼は手段なので何を目的にやっているかをわかっていただきたい。まずは自分の命を自分で守るということ、集まるときも日頃危険な場所を頭に置いていただく活動をしていただきたいと思っています。

避難情報は、蛭川が今年2回出て一番多い。蛭川は雨の降り方が激しいです。加子母、付知の奥、それから阿木が土砂災害警戒判定メッシュの中で赤くなる可能性が高いです。それから坂本も2回目が出そうになった状況です。夜中の3時半に避難所が閉鎖になったのは、避難所に誰もみえなかったのと、土砂災害の発生危険がなくなったからです。避難者がみえるときにたたむことはありません。一番怖いのはデマ。確証がない話をあたかも自分が知っているなかで、こうなんじゃないの、という話に変わってデマとなって広がったときに災害が起きやすくなります。夜中の3時半に帰ってくださいとは言いません。3時半の閉鎖は利用者がいなくて、雨が減ってきたことを確認したからです。

●〇〇さん

閉鎖しますだけだったので、危険がなくなった、誰もいませんので閉鎖しますということを一言メールに書いてほしい。

●市長

メールの内容が不足していたことはわかりました。高齢者も誰も来ていただけなかったことのほうが問題ですね。危険なことを認識してもらうことについて、広報も足りないが、検証しなければならないことは誰も来てもらえなかったこと。安全をしっかりとつって安心していただくことは大切なことです。

●〇〇さん

発足のときから中津川市の女性消防団に入っています。応急手当の講習会などに参加して、子どもを守るため家族を守るために必要なことをたくさん学びました。市のイベントにも出たり、全国の女性消防活性化大会では各地域からの発表を見る機会もありました。自分や家族を守るために興味がある方は、よろしければ（女性消防団員を）募集しております。若い方、年配の方、お子様の手が離れた方も、体力勝負ではないのでできることから一つずつやっていただければと思いますので、興味ある方お願いします。お子様がいらっしゃる方も、子どもも参加できるときに一緒に見学できます。

四ツ目川の氾濫のこともあり、市役所や消防署など市の中心がここになっているので少し心配なところもあります。

●市長

貴重なご意見ありがとうございました。昨日、付知、加子母で斧入式がありました。次期式年遷宮に向けての準備が始まりました。杣師が大きなヒノキを伐り倒し、これから始まる次期式年遷宮に向けた安全祈願祭という位置づけです。式年遷宮は16年先ですが、8年後に本式の用材として切り出しが始まります。1万本近い用材をこれから選び、伐採して、神宮へ運ぶ作業が始まります。

この話は、若者の地元定着に関係してきますが、寒いなかだったのですが、今回初めて中学生80数名に参加してもらいました。テレビ、新聞各紙が中学生にインタビューしてくれました。これから60、70年頑張ってください子どもさんにインタビューしてくれました。新聞社も取材してくれたことは非常に嬉しかった。その子どもたちが、地元にある歴史的な行事を知ることができて、目で見ることができたことに誇りを持ちたいと言ってくれた方もみえました。それが大変うれしかった。

いま、中津川市には19の大学が出入りしてくれています。それぞれの大学がそれぞれのテーマを持って加子母、坂本、阿木、蛭川、山口（賤母）でやっています。大半は加子母で勉強しています。今年協定を結んだ大正大学の学生さん14名が40日近く加子母で生活しながら、加子母地域の歴史や人柄、環境。学生から見た地域のよさがどれだけ活かされているか、それを課題ごとに分けてどうすればいいかという発表をしてくれました。その中で、加子母で住んでもいいと思う人、と聞いたら全員が手を上げたんです。若い方が、田舎文化に対して決して拒否反応は示していなかった。自分たちの勉強のテーマとしての魅力があるということと、実際ここに住んで収入を得て働いて生活するとなると条件は変わりますが、非常に正確な目で見てもらったと思います。大正大学の場合は1年生で40日間、また3年生になって40日間のサイクルで来てくれます。また来年の1年生も来る予定です。加子母の明治座は123年の歴史がある芝居小屋ですが、域学連携で加子母で勉強していただいているみなさんに見ていただいて、建物を耐震化改修、さらなる観光の目玉として活用できるようにと議論してもらって、H27から工事が始まってH28に完成しました。板葺きの上に2,000近くの石を置いた屋根になりました。

学生さんが中津川の魅力について一生懸命やってくれます。しかし、自分たちは逆に、地元に住んでいると当たり前になっています。ちょっといいだけでは面白く思わない。今日、市外から中津川に住んでいただいている方もみえるわけですが、その目で評価してもらいたいというところもあってまたの機会を楽しみにしています。われわれには気づかないこともたくさんあります。女性のみなさんに集まっていたのは、男性が混じった中ではしゃべりにくいということもこうした中に出していただければ、中津川にこれからも住んでいこうよという気持ちになっていただけるのではないかという目的を持ったもの

です。人口減少がもたらす中津川力の低下を押し留めた上で、さらに膨らませたいという
と思います。このためには、トータルバランスの整ったみなさんからご意見を頂き、それ
を活かすことができるかどうかを私たちが検証を重ねながら実行していくことが大切です。
ご意見をいただくことについては間口を広げているつもりです。またご意見をいただけれ
ばと思います。